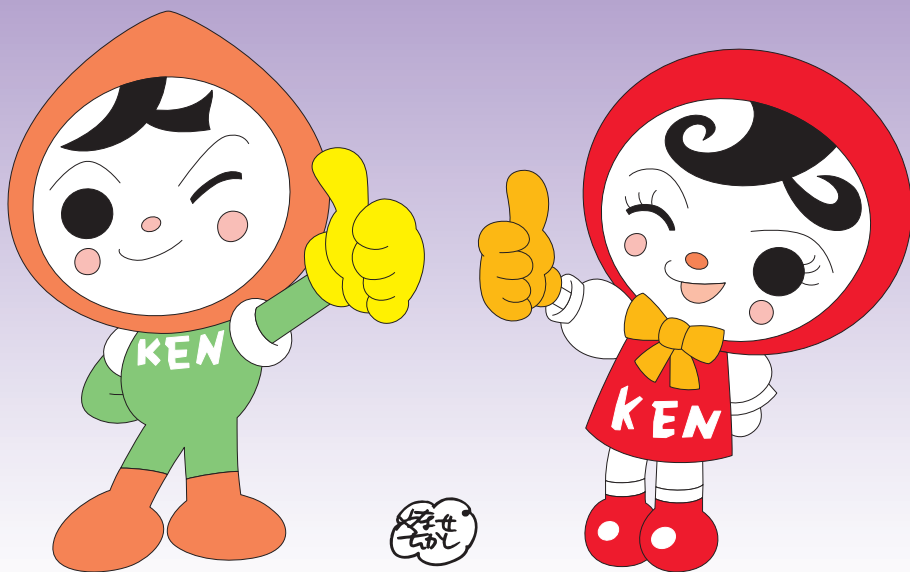


令和6年度
第43回
全国中学生人権作文コンテスト
広島地区大会入賞作文集



人権イメージキャラクター
人KENまもる君

人権イメージキャラクター
人KENあゆみちゃん



広島法務局・広島人権擁護委員協議会



第四十三回

全国中学生人権作文コンテスト

広島地区大会 入賞作文集

は し が き

全国中学生人権作文コンテストは、中学生のみなさんが「人権」について考え、書くことを通して人権尊重の重要性や必要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身に付けること、さらには、入賞作品を広報することによって、広く人権尊重の考え方を根付かせることを目的としています。この度も、いじめの解消、戦争のない平和な世界への願い、障がい者やLGBTQに関する偏見・差別の解消、高齢者への配慮、安心して利用できるインターネットなど、様々な角度から人権に関する自らの体験やそこで考えたこと・調べたことなどを作文にして応募していただきました。

ぜひ、一作品一作品をじっくり読んでみてください。作者が体験したこと、考えたこと、願っていることなどが心の中に確実に伝わってくるでしょう。そして、書かれている内容を自分のこととして捉え、今後の日常生活の中にどう生かしていこうかと思いを巡らせていただきたいと思います。また、この「作品集」を学校図書室に配架するのみならず、学級ごとに回覧して「朝の読書」の一冊に加えたり、お昼の給食放送や学年集会の一つの活動として係の人が読んで紹介したりするなど、様々な場面で活用いただくことを願っています。

終わりに、応募いただいた生徒のみなさんのもとより、学校の先生方、その他の関係者の方々に対し、深く感謝申し上げます。次回も、数多くの参加・応募があることを心より期待しています。

令和七年一月

第四十三回全国中学生人権作文コンテスト

広島地区大会審査会委員一同

目次

はしがき

【広島県大会優秀特別賞（NHK広島放送局長賞）・広島地区大会優秀賞】

心のバリアフリー

広島市立落合中学校

三年 荒木智成…1

【広島県大会優秀賞・広島地区大会優秀賞】

「一人じゃないから」

広島市立亀崎中学校

三年 初柴未央…4

戦争と人権

広島市立可部中学校

二年 吉永小春…7

【広島地区大会優秀賞】

十人十色

広島大学附属東雲中学校

一年 匿名希望…10

個性を尊重する

匿名希望…14

自分らしく

府中町立府中緑ヶ丘中学校

三年 西尾 さくら…18

人に伝える

海田町立海田中学校

二年 斎木 梨湖…21

私の思い

熊野町立熊野東中学校

三年 匿名希望…25

【広島地区大会佳作】

ボランティア体験で学んだこと

広島市立牛田中学校

二年 松井 葉南…28

私を変えてくれた弟

熊野町立熊野東中学校

二年 小出 安千佳…31

高齢者の幸せとは

広島市立五日市南中学校

二年 迫田 紫月…34

SNSの問題と対応策

広島市立亀山中学校

二年 宮田 智規…37

本当の自分でいたくて

広島市立祇園中学校

二年 中本 絢菜…40

声を聴いて

広島市立段原中学校

二年 匿名希望…43

【広島県大会優秀特別賞（NHK広島放送局長賞）・広島地区大会優秀賞】

心のバリアフリー

広島市立落合中学校 三年 荒木 智成

バスに乗って出かけたある日のことです。その日の車内は混んでいました。また道路も渋滞しており、なかなか先に進みません。僕も含めた多くの乗客は、イライラしているように思えました。

そんな中、車椅子に乗った年配の女性がバス停で待っている姿が見えました。乗れるのかな、僕がそう思っているとバスが止まり、運転士さんが降りて、車椅子が乗れるように補助スロープを取り付け始めました。

バスが止まってどのくらいの時間が経ったのか、後続のバスが追い抜いて行きました。車椅子の扱いに慣れていないのか、運転士さんは一人で手間取っていました。

「まだ？」

「抜かされたじゃん。」

小さい声が聞こえてきました。車椅子の女性が申し訳なさそうに座っているのが見えませんでした。

「すみません。」

その女性は周りの乗客に頭を下げ、車椅子を固定された後も小さくなって乗っているように思えました。バスはまたゆっくりと動き出しました。

混雑したバスの中で揺られながら、僕は何となく居心地の悪さを感じていました。車椅子のお客さんは何も悪くないのに、申し訳なさそうにしていたり、周囲に謝ったり、必要以上の気遣いをしているように見えたからです。バスに乗っている人は、誰もが一刻も早く目的地に着きたいと思っっています。でも、もう少し優しい対応ができないものかなと、寂しい気持ちになりました。

また別の日のことです。僕がバスに乗っていると、目の不自由な高校生が白杖を持って乗車口のステップを上がって来ました。白杖で周りを探りながら車内に入る様子を見て、上手に上がれるんだなあと思っっていると、

「すみません、僕は目が見えません。空いている席があつたら教えてください！」と高校生が大きな声で言いました。すると、すぐに

「ここ空いていますよ。そこから二つ前！」

「左、左！」

と、乗客の中から声が上がりました。高校生は座席を伝いながら、空いていた席に座り、「ありがとうございます！」

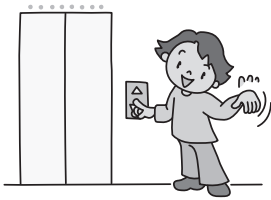
とまた、大きい声で言いました。高校生が座つたことを確認して、バスも走り出しました。その際、運転士さんが、

「皆さん、ありがとうございます。」

と、アナウンスされました。僕はこの一連のやりとりを目の当たりにして、心があたたかくなりました。いいバスに乗ったなと嬉しくなりました。

バスに乗った時に体験した二つの出来事、どちらも僕は黙っていました。もし、自分の友達が困っていたら、僕も必ず助けます。でも、それでは本当の優しい社会にはならないと思います。困っている人が遠慮をするのではなく、一人ひとりが大切にされる世の中になることが理想です。

知らない人ばかりの中で、声をかけるのはとても勇気がいることです。だけど、「助けてください」と言う側も、勇気を出して言われているんじゃないかと思いました。例えば、席を譲ることなら、僕にもできそうです。心のバリアフリーを目指して行動してみようと思います。



【広島県大会優秀賞・広島地区大会優秀賞】

「二人じゃないから」

広島市立亀崎中学校 三年 初柴 未央

「え？おまえって中国人なん？」

その言葉を聞いて、私は瞬時に背筋が凍りつくのを感じた。二度と聞きたくない、嫌がらせを含んだ口調で言った言葉だった。

私の母方の祖父は日本と中国のハーフで、祖母は純血の中国人である。クォーターの母と中国人の父を持つ私は日本人の血筋を八分の一受け継ぐワンエイスである。だから私にとって周りに混血の人がいる事は日常的だった。だが、混血が理由で差別を受けることもあった。

初めて混血が嫌だと思ったのは小学一年生の時だった。当時六年生だった男子四人組からかわれて、学校に行きたくないと思われ、母を困らせてしまったことを今でもはっきり覚えてる。

「見た目に何の違いもないのにどうして差別を受けなくちゃいけないの？」

毎日のように泣きながら母に聞いた。差別を楽しむ姿。涙を流すのを面白そうに見下ろす目。その全てが今もなお、私の記憶に残っている。その後、彼らが卒業しても、あの

時の出来事は度々悪夢となって、私を苦しめ続けてきた。家族に心配をかけたくないから、毎回夢から覚めた後は、目元に残った涙を拭ってから部屋を出るようになっていた。

一人で全てを抱えていた日々もあったが、成長するにつれて、私は家族や友達に相談することができるようになり、つらかった過去を徐々に手放せるようになった。未だに、他の人に自分の秘密がばれて異様な目で見られるのは怖い、そんな時はいつも弟が、

「姉ちゃん、一人じゃないから。」

と元気を与えてくれる。だから、私は前向きに生きていこうと思えた。

だが、それは思っていたより簡単な事ではなかった。暗い性格だった小学校時代の自分と別れを告げて、中学校からは徐々に明るくなり、差別や平和に関する活動も始めたが、やはり差別は簡単になくなるものではないと強く認識した。

また傷つくのが嫌だったから、中学校に入学しても私は混血の事を隠していた。だが、どこから得た情報なのか、新しくできた友達から、

「初柴さんって中国人だったん？」

と聞かれた。中学校の三年、必死に隠そうとしていた秘密が三ヶ月も経たずに明かされた。ただ、想像していたのとは違い、差別をする人は一人もいなかった。混血でもみんなと友達でいられる日々が続き、だんだんとそれが当たり前になってきた時に、私は一生忘れることができない、あの思わず恐怖を感じる目を再び見た。

学校からの帰り道、いつものように友達と別れて家に向かってしていると、正面から他の

学校が歩いて来ているのが見えた。すれ違いざまに彼が口を開いた。

「お、中国人じゃん。」

瞬時に記憶がフラッシュバックした。

小学四年生の時、私はいくつか習い事を始めた。その中で唯一、英会話は半年も経たずにやめた。同じクラスの生徒が、先生がいない隙を見てテキストに落書きをしてきたり、発音を笑ってきたりと色々な嫌がらせをしてきたからだ。そして、それを最初にし始めたのがまさに再び会ったこの人だった。

今までの自分なら、ここでまた傷ついて何もできない。だが、今の私には支えてくれる人がたくさんいると思うと自然に気持ちが悪くなった。遠ざかる背景を見て、私はかつての自分のように差別で苦しんでいる人に私の作文を通して勇気を与えたいと強く思った。

私は皆さんにもう一度考えてもらいたい。知らない間に誰かを差別し、傷つけていないか。また、差別を傍観していないか。差別の記憶、心に残った傷跡は永遠にその人に伴う。だが、あなたの行動一つで誰かの支えになることだってある。少しでも意識したら、それは誰かを救う一歩となるのだ。

差別で苦しんでいる人は、何事も一人で抱えないで、信頼できる人に相談してみてください。きっとあなたの味方をする人が周りにいるから。「一人」じゃないから。

戦争と人権

広島市立可部中学校 二年 吉 永 小 春

「巻きこまれたのは、日本人だけじゃないんだ」

中学一年生の平和学習で碑巡りに参加して私は衝撃を受けた。一九四五年八月六日、八時十五分に投下された原子爆弾で、多くの人が亡くなった。小さな子供、私と同じ中学生、大人まで。無差別に命を奪われた。それは、今まで勉強していたのでよく知っていた。しかし、一つの慰霊碑で何か不自然に感じた。それは、日本ではなく韓国という文字が書かれていたからだ。韓国人原爆犠牲者慰霊碑。その碑には、日本の植民地支配がもたらした惨劇への悲痛な思いや平和への誓いと鎮魂の言葉などが刻まれていた。私は、日本人だけではなく、多くの韓国人が被爆し、亡くなったと知り、ひどく驚いた。

中学二年生になり、被爆伝承者の方の話を聴く機会があった。その方は、原爆の恐ろしさを描いた「いわたくんちのおばあちゃん」という絵本の「いわたくん」のお母さんであり、「おばあちゃん」の娘さん。絵本の中でおばあちゃんは「いやーよ」と言つて家族と写真に写りたがらない。なぜなら、高校生の際に家族写真を撮り、その数日後に原爆で家族を失ったからだ。それ以来、一緒に写つた家族が亡くなったあの夏が忘れられないから、大切な孫や娘と写真を撮ろうとしなかった。私は、たくさんの家族に囲ま

れているおばあちゃんは幸せそうではかったなと思った。その反面、家族と写真を撮りたがらない心の傷は消えないんだなと感じた。

私は夏休みに被爆樹木のシダレヤナギを見に行つた。葉が青々と生い茂り、堂々と立っていて立派な木だと思つた。被爆当時には、葉が落ちて、枝が折れ、何とか立っているようだった。木がどんな思いでここまで再生したかは分からない。話すことができないから。

いわたくんのおばあちゃんと被爆樹木を比べると、共通点と違う点があることに気づいた。共通点は、どちらも被爆しているということ。違う点は、おばあちゃんは心の傷を人に話して伝えられること。被爆樹木はボロボロの状態から再生することはできても、それまでの気持ちを話して伝えることができない。

私は戦争がもたらす影響について考えるようになった。大勢の命が奪われること。家族や友達とおしゃべりすること。好きな事して楽しいと思うこと。そんな当たり前の日常を壊してしまう。また、人権が無視されることだ。私は人権について辞書で調べてみた。人権とは「誰もが生まれながらにして持っている、人間として幸せに生きていくための権利のこと」と書いてあった。しかし、戦争ではその人権は全く考えられていない。戦場に行きたくなくても、戦わなければならぬ。死にたくなくても攻撃されてしまう。戦争と関係のない国の人がいても関係なく攻撃をされてしまう。

戦争が起こる原因には色々な人権問題が関わっていると思う。異なった民族の人たちが考えの食い違いから争いを始めること。宗教や価値観の違いから争いが起こること。

それはやむを得ないことだろうか。確かに、お互いの全てを理解することはできないかもしれない。けれど、認めようとする気持ちが大切だと思う。

被爆伝承者の方の心に残った言葉がある。

「日本が平和になれたのは、戦争が終わったからではなく、戦争を経験した人たちが、努力したから。」

私はこの言葉を聞いて、はっとした。戦争が終わること、日本は平和になることができたと思っていたからだ。今の日常が当たり前だと思えることができるようになったのは、戦争の恐ろしさを知っている人たちがいるからだ実感することができた。

「平和は当たり前じゃない」

私は、この事をしつかりと胸にとどめておこうと思った。

私は人権問題を解決することが平和につながると思う。今、私達にできることは、身近にある人権問題を知ること。障害のある人、高齢者、外国人、性的マイノリティの人への偏見や差別をなくすこと。「おかしいな」と思ったら、一度立ち止まって本当に正しいか考えてみることに。

一人一人の意識で、世界を変えられることができると信じている。

【広島地区大会優秀賞】

十人十色

広島大学附属東雲中学校 一年 匿名 希望

「お母さん何しよん？」

「特別支援の免許取ろうと思つて、勉強しよんよね。」

「特別支援学級の先生になるん？」

「うーんそれもいいけど、普通学級でも困っている子の役に立ちたいんよね。誰にとつても、あると助かるような配慮をしたいんよね。」

と、この夏僕と母は会話をした。母の答えに、僕は半分、分かったような、分からないような……。僕の母は、小学校の先生だ。今普通学級の担任をしているが、特別支援教育に興味があるらしく、オンライン講習を受けていた。特別支援学級って小学校のひまわり学級、中学校では三組のことだったよな？と僕は思った。それはそんなに普通学級と違うのだろうか。

そういえば、僕には、幼稚園と小学校の時、同じクラスだったKくんと言う友達がいる。幼稚園の時は、担任の先生ではなく彼には必ず一人先生が付いていて、いつも一緒に行動していた。Kくんは、時々、大きな声を出したり突然走り出したが、僕たちと何

も変わらない。いつも一緒に過ごすのが、当たり前だった。けれどKくんにはいつも先生が付いていて、「何でだろう。」と幼いながらに不思議に思っていたことを覚えている。Kくんに優しくすると、付いている先生が代わりに、「ありがとう。」と言ってくれたり、「うれしいと思うよ。」と伝えてくれたりした。

小学校に入り、Kくんは僕達と同じクラスで勉強をすることもあったし、「特別支援学級」という「ひまわり学級」で勉強することもあった。僕達のクラスにいる時には、やっぱり介助の先生が付いていた。その先生が、一緒に勉強を教えたり、声をかけたりしていた。それからは、同じクラスになることもあったし、違うクラスになることもあったが、遠からず近からずという距離感だったような気がする。

六年生の時、久しぶりに同じクラスになった。Kくんは覚えていたか分からないが、僕は「Kくんがいる！」と懐かしく思った。授業で調べ学習を発表する時には、同じグループと一緒に発表した。Kくんが難しいことは代わりにやった。運動会の際には、介助の先生は付いてなく、僕達と一緒にソーラン節をおどることになった。移動の時、僕が後ろから合図を送ったり、手を引いたりした。僕にとっては、それが全然苦ではなく当たり前前だった。けれど、練習の後等に介助の先生に「助けてくれてありがとう。」と言われると、変な気分だった。特別なことは何もやっていないのに：ずっとこうしてきたのに：と。

学校の外で、Kくんに出会ったことがあった。スーパー銭湯に家族で行っていた時、

お風呂上がりにお母さん達を待っていたところに、Kくんがいた。「あ！Kくん」と心の中で思ったのに、声が出なかつた。僕のこと分らないかもしれない：声をかけて知らんぷりされたらどうしよう：周りの人になんて思われるかな：咄嗟にそんなことがグルグル頭の中をめぐり、声が出なかつた。

その後で、母にそのことを話すと、

「声かけてあげればよかつたのに！。きつと喜んでくれたと思うよ。お母さんも話してみたかつたな。」

と言つていた。僕の意気地無し。少しの勇気がでなかつたこと、当たり前ができなかつたことに後悔した。学校の中では当たり前前にできていたことが、校外に出て当たり前前にできない自分がいて、少し自分が嫌になつた。

僕もどこかでKくんのこと…本当は特別だつて…はずかしいって…思つてた？いや、そんなことはない。そんなふうにしたことなんて一度もなかつた。話しかけても答えてくれなくても、一緒に遊んでいてもふいにどこかへ行つてしまつても、僕達は友達だつた。

「障害を理由とする差別をなくすこと」と学校で教えられたこともあつたが、そんなきれいごとではなく、一緒に過ごし成長すること、差別なんか生まれなかつた。障害があるとかないとか、分け隔てられることなく、共生できる社会、助けるとか助けられるとか関係なく、手を差し伸べ合える社会を、僕は目指したい。

小学生の時、先生が「十人十色」という言葉を教えてくださった。世の中に同じ人は一人としていないのだから、みんなの違いを個性と認め合えればいい。僕はこの言葉が気に入った。人と違うことをおそれないで、僕も自分の信じる道を進んでいきたい。



個性を尊重する

匿名希望

僕には2歳年下の弟がいます。

僕たちは年が近いということもあり、よく一緒に遊びますが、けんかもたくさんします。僕が弟に弟ができていけないことを注意すると、納得してくれないことが多く、よく反論してくるのでけんかになります。

弟が小学校1年生の時、母がスクールカウンセラーから発達障害の検査を受けるように言われて、弟は、小学校1年生の春休みにWISKなどの検査を受けました。そこで弟は、発達障害とは言われなかったけど、いろんな特徴があることを母は説明を受けていました。

それからも僕たちは普通に小学校に通っていましたが、僕が小学校6年生で弟が小学校4年生の12月に弟の眉毛が突然抜けました。

僕はその時あえて弟に何も言いませんでしたが、とても辛いだろうなと思いました。もし自分の眉毛が突然抜けたらとても驚くし、こんな状態では絶対に学校には行きたくないなと思いました。

弟は学校に行く度に眉毛が生えても抜けるを、繰り返していたので、母は、学校へ行

くことが弟のストレスになっていると感じ、年が明けてすぐに弟を学校へ行かせるのを止めました。

弟が学校へ行かなくなったことで、母は初めは弟の勉強をどうしようかと悩んでいたけど、弟の眉毛はそれ以来抜けることはなく、その後も自宅でオンライン学習をしながら、サッカーだけは習い続けて2年間経ちました。

学校に対して大きなストレスを感じていたかは分からないけど、あの頃は、眉毛が抜けたことで学校へ行くことを嫌がっていました。

その後、大阪へ脳波の検査にも行きました。そこで弟は、ADHDとアスペルガーが少しあると診断されました。母はショックを受けていましたが、ただ僕は、ADHDなどについて調べ、どのように接したらいいか考えました。

弟は、忘れ物が多く、片付けることが苦手でゴミ箱に捨てられなかったり、出したものを元の位置に戻すことが苦手です。だけど、好きなことへの集中力はずば抜けて高く、関心のあることへの記憶力もとてもいいです。一緒に遊んでいる時に、僕が思いつかないような発想することもすごいと感じています。

僕は弟が発達障害だと診断されて、僕なりに色々調べたりしたけど、障害という名前がついているだけで、その人の個性だと感じました。

僕自身、世の中で見たら普通の人間なのかもしれないけど、決して完璧ではなくできないこと、苦手なこともあります。弟は発達障害と診断されただけで、得意なこと、苦

手なことがあるということについては、なにも変わらないと感じました。ただ、苦手なことがたくさんの人と比べて突き抜けていると「変わっている」と言われたり、「発達障害」と診断されたりするんだらうなと感じました。

そういう意味では、この世の中は、みんなと同じでなければならぬ。そうでなければ、「障害」と呼ばれてしまう世の中なんだと感じました。

学校生活の中で、集団で生活することの大切さや、人とのコミュニケーションの大切さなど、僕はずっと学んできましたが、それが思うようにできない人もいると思うし、だからといって、その人が悪いわけでもないんだと思いました。

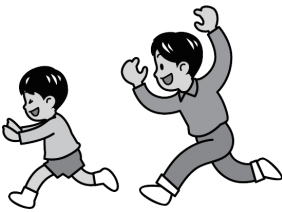
よく世界の偉人は、ほとんどの人が発達障害と言われているけど、やはり何かがずば抜けると何か欠落してしまったりするのだと思いました。そういった意味では、弟にも人にはない光る部分があつて、逆に周りの人が当たり前のようにやることができなかったりするのだと思いました。そういう弟のような人が世の中にはたくさんいるんだと思ったら、もつといろんなタイプの人が生活しやすい世の中になればいいなと思いました。

今の日本ではそれは難しいのかもしれないけど、「障害」ではなく、「個性」と心から思えるような世の中になれば、たくさんの人を受け入れ、たくさんの人が生きやすい世の中になると感じました。そして、現段階ではそうなるのが難しいのであれば、周りにいる人間がその人を理解し、受け入れることで、よりその人が生きやすくなるのでは

と感じました。

世の中の人が1人でも多くそのような気持ちを持つことができれば、イジメもなくなり、もっと生きやすい世の中になると思います。

最後にこの春から2年間の不登校を経て弟は中学校へ行き始めました。2年間のブランクがある中で大変なことはあるとは思いますが、自分なりの道を見つけていってほしいと思います。



自分らしく

府中町立府中緑ヶ丘中学校 三年 西尾 さくら

私は、かっこいい服装が好きでよくズボンをはいていてスカートをはこうと思ったことがあまりありませんでした。性格も少し男っぽくて人から、

「男みたい。」

と言われたことがありました。当人からしたら悪気がなく言っているように聞こえましたが、私はもやもやした気持ちになり自分はおかしいのかな、と思うようになりました。中学校の制服でもズボンにしたいと思っていたけれどまわりから、

「女の子だからスカートにしたら？」

と言われました。迷ったけれど制服をスカートにしました。特に嫌だなど思うことはなかったのですが、他の女の子がズボンの制服をはいているのを見ると「かっこいいな」や「ズボンにしたかったな」などのズボンの制服に対する羨ましさと好奇心、スカートを選んでしまったことを後悔するようになりました。「女の子だから」その言葉は私を不快にさせました。女の子だから女の子らしくしないといけないの？ズボンにしてはいけないの？私はただ自分らしくいたいだけなのに。

そんなある日、学校で心の性についての授業があり、実際にトランスジェンダーや同

性愛者のかたから話を聞く機会がありました。その中でLGBTという言葉を初めて聞きました。LGBTとは、Lはレズビアン女性同性愛者のこと、Gはゲイ男性同性愛者のこと、Bはバイセクシユアル両性愛者のこと、Tはトランスジェンダーで体の性と心の性が一致しないことをいいます。トランスジェンダーは知っていたけれど同性愛者のことについて知らなかったのと、心の性はたくさんあるのだと知りました。他にも心の性とは関係なく、男性がかわいい服やスカートをはいたり女性がかっこいい服を着たりズボンをはいたり他には気分によって違う服を着ていてズボンやスカートをはいている人もいて、性別を気にせず服を着ている人がいると知り、自分も気にせず自分の好きなものを身につけたりする自信をもち自分らしく生きていいのだと思いました。かっこいい服装で友達に会った時には友達が、

「かっこいいね、似合ってるよ。」

と言ってくれて本当にうれしかったです。自分らしくということはとても大切なことだと改めて思いました。

世の中には色々な人がいます。好きなもの嫌いなものも人それぞれです。例えばスポーツが好きな人や苦手な人もいます。絵を描くのが嫌いな人や好きな人もいます。勉強が好きな人嫌いな人それぞれあります。趣味も違います。体を動かして運動したい人もいれば家でゆっくりして音楽を聴く人もいます。ファッションも同じように違います。かっこいい服が好きだったりかわいいうるでしよう。ファッションも同じように違

のも一つずつ違います。男の子でスカートがはきたいと思う人、女の子でズボンをはきたいと思う人気分によってスカートやズボンをはいている人など色々な人がいます。一つ一つ自分の個性なのです。男の子だったら男らしく女の子だったら女らしくよりも自分らしくが一番大切であり、見た目や性格も自分らしい方が楽しく過ごせると思います。無理に当てはめようとするのではなく自分らしい個性がみんなさらけ出せる社会になってほしいです。今はまだ多様性について理解していない人もいて、見た目で偏見を持ってしまう人達もいます。それで決めつけてしまつて相手を傷つけてしまうこともあります。見た目で決めつけるのは違います。その人の大切な個性です。個性がなければみんな同じ人間になってしまいます。個性があるから人間は面白いしその人に興味をもったりして人間関係がうまれるのです。

今後さらに、みんなが多様性を理解し、見た目を自分の偏見で決めつけずみんなが自分らしく生きていける社会になってほしいです。

人に伝える

海田町立海田中学校 二年 齋 木 梨 湖

私は今左眼が見えていません。それは網膜剥離という病気から何度も手術を繰り返し、角膜が弱っているからです。数ヶ月前までは網膜の安全のため運動が禁止でした。そのため強い衝撃が当たらないように。少しでも走ったりしないように。気を引き締めて学校生活を送る日々が約半年間ありました。幸いにも、私の周りの人達は優しくくて大きな不安等なく楽しく学校生活を送ることができました。

その半年の中に学校行事である体育祭がありました。私は体育祭でクラス、学年が一体となって戦うというのが好きでした。ですが、運動ができない、走ることができないので体育祭の競技に参加することができなくなり私に出来ることは何かかと考える日が長くありました。

ある日先生に、

「普段先生がしている事、どんなサポートがあつて体育祭ができているかを見とさんちやいね。」

と言われた日がありました。優しい声掛けとして話してくれたと思いました。ですが、

私はこの意見に対して何か心がモヤモヤするような気持ちを抱くようになっていました。
なので私は母に、

「見るだけじゃないとだめなの？」

と聞きました。そこで母は、

「本当にあなたがしたい事はなに？本当は何かの形で競技に参加したいんじゃないの？
それが自分であるならそれを先生に相談しなさい。」

と声をかけてくれました。私は母の言う通り、何かの形でみんなと競技に参加したいと
思っていたので、養護の先生に私がしたい事を話しました。すると、先生は私が言った、
「真ん中でなくていい、輪を作る仲間でいい。」

という言葉からポンポンを使った応援という案を出してくれました。毎年ポンポンはダ
ンスで使われていて応援でも使われていました。ですが、今年からダンスがなくなつた
ためポンポンが全集団ありません。なので、他の集団からの賛否両論もあるかと思う中、
先生は残り少ない体育祭までの時間に放課後ポンポン作りを手伝ってくれました。また、
保健室が使えない時や部活がない日にクラスの友達がポンポン作りを手伝ってくれたり
しました。その結果体育祭当日に私達を作ったポンポンを他学年の生徒も使って応援し
たり、私はトラックの中でぶつかったりしないように注意しながら、ポンポンを持って
応援、声かけをしてクラスの優勝に貢献しました。

私が先生に相談しなければテントでずっと見ているだけの体育祭だったかもしれませ

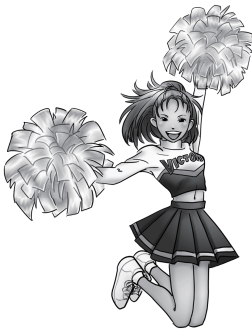
んが、自分の気持ちを相手に伝えるという事をする、一般的な参加ではないけど少し違う形での参加をすることができました。そのため、みんなのように競技に参加しなくても楽しい体育祭を過ごすことができました。

この経験を通して、「自分の体は今正常ではないから諦める」ではなくて、他に何かできることはないのか考え、それを誰かに話す。口にする。ということがいかに大切か思い知ることができました。その思いついた案がどんなに一般的ではなかったとしても、どんなに周りに言われるようなことだとしても、自分が満足できるのであれば自信を持って周りに話すという事をしていくと明るい未来が見えてくるのではないかと思えます。ただ、自分はまだ人に相談など本音を話すタイプではない人がいたり、周りに話を聞いてくれる人がいない人などいると思っています。なので私は、普段自分の本音を誰かに話すことが難しい人や周りに話を聞いてくれる人がいないと思っている人が最終的には気軽に話ができるように人との接し方について考え、行動していこうと強く思いました。

初め、体育祭では先生が普段どのようなことをしてどのようなサポートをしているのか見とくようにと言われていたことに対してモヤモヤしていました。体育祭後私は、養護の先生の行動であることを学ぶことができました。実は私、養護の先生と話したことがなかったのです。ですがこんなに自分の意見を肯定してくれ、背中を押してくれたため、人との接し方について強く考えていこうと思えました。

誰かが言った何気ない言葉や、初めはいい気持ちにならなかったような言葉も後から自分を変える言葉になってくることも非常に多いのではないかと思いました。

自分がしてもらって嬉しかった事を周りの人にしていき、沢山の人が嬉しくて幸せな日になれるように少しでも近づけていけたらいいなと思います。



私の思い

熊野町立熊野東中学校 三年 匿名 希望

私は、小学四年生の時に障害のためノイズキャンセリング機能がある左右一体タイプのワイヤレスイヤホンを学校でつけるかつけなかないかで悩んでいました。なぜなら、クラスの子に自分が障害者だということを話していなかったからです。それに障害者だということを知られたら友達からどう思われるのか今までと関わり方や接し方が変わってしまうのではないかと、とてもこわかったからです。親にも言っていなかったのですが、学校ではつけなないようにしようと思っていました。でも、季節が夏だったのでどうしてもエアコンが必要になってくるため、エアコンが作動するのですが風の出る音に耐えられなくなってしまうイヤホンをつけることにしました。実際に家でつけてみると効果は凄く、自分が普段気になっていた音が遮断されるためとても快適でした。でも、自分が快適だと思っても、人にどう見られるかとは変わってくるので、クラスの友達に伝えるまでとても怖かったです。いざ、クラスの友達に自分が障害者だということを言うとき手の震えが止まりませんでした。親が先生から伝えてくださいというのを言ってくれていたのですが、担任の先生がクラスの皆に伝えてくれました。でも、クラスの友達の見え方を見るまでは、やっぱり手の震えが止まりませんでした。でも、自分が障害者だという

のを伝えた後のクラスの皆の反応で涙があふれるかと思いました。クラスの皆がこれまでと変わらず接してくれてとても嬉しかったです。私はこの時の事を忘れることはないと思います。それと同時になんでも相談できる友達がいる事は大事だなと思いました。

ですが、六年生の時に凄く悲しい出来事がおきました。それはなにかというと、六年生に進級してから障害の症状が悪化して行って、イヤホンじゃどうにもならなくなったので、ヘッドホンにする事になって、ヘッドホンを買って初めて学校に持って行った時に四年生の時と同様に先生に伝えてもらいました。その時は、四年生の時と同様に皆、今までと同じように接してくれてとても嬉しかったです。でも、月日が流れ、二期の九月頃に運動会の練習をしている時に、自分のにちょっと難しくてできない部分があったんですけど、その時にとある女の子の友達が、私が障害者だというのを咄嗟に思い出したのか「障害者だからってできないで許されると思うなよ」って言いました。私は障害者ですけど自分のことをずっと一日中障害者だと思っすごしてきたわけではありません。なぜなら障害者だけど普通の子と同じように接してほしいし、普通の子と同じように関わってほしかったからです。だから最初ヘッドホンやイヤホンをつけないのであればこれからは絶対友達に障害者だということを言うつもりがありませんでした。なのでこの言葉を友達の口から聞いた時はとても悲しかったです。

だから私は、沢山の人にこれだけは知っていてほしいです。自分から、障害者になりたくてなる人なんていないから障害者だからとか普通の子なんだからというので差別し

ないでほしいのでやらないでほしいのと、障害者だろうが障害者じゃなからうができるものでできないもの得意なこと不得意なこと人それぞれあります。だってそれもその人の個性だから。世の中に同じ性格、同じ顔、全部が同じ人だらけじゃ気持ち悪いじゃないですか。だから障害者だからできないとか普通の子だからできるとかいう発言もしてほしくないですし、私はそういう発言が嫌です。私は障害があってもなくても、誰もが平等に自分の思いを主張する事ができ、障害者の人や困っている人がいた時に助けられる人、相談にのれる人、なにより手を差し伸べることが出来る人こそが本当に思いやりのある人だと思います。だから私は、そういう人が世の中にふえてほしいなと思います。

【広島地区大会佳作】

ボランティア体験で学んだこと

広島市立牛田中学校 二年 松 井 葉 南

夏休みに心身障害者福祉センターで「見え方に障がいがある人へのボランティア」
「障がい者の介助」の二つを体験に行きました。この体験は今年で2回目の参加です。
去年は簡単な仕事だと思って参加したらどのような感じにしたらよいか分からずに戸惑って
慣れるのに時間がかかって終わってしまったので今年は張り切って参加しました。
今回の「見え方に障がいがある人へのボランティア体験」では音訳をしました。音訳
とは、見え方に障がいがある人でもはっきり聞こえる大きさの声で短い文を読むこと
です。

音訳サークルの皆さんに教えてもらいました。サークルの方には「アナウンサーみた
いにゆっくり、はっきり読んでください。」と言われました。一つ一つの単語のイント
ネーションや文の区切り方などを学んだり、実際に館内放送用に録音して流してもらい
ました。放送時刻になると施設内の利用者の方が耳を傾けてくださって少しでも情報を
発信できているんだなと思いつても嬉しかったです。

「障がい者の介助体験」では実際に車いすに乗って短いルートを進む体験をしました。

介助者は、車いすの車輪のところに乗っている人の手がなにか、フットレスト（足を置く場所）が上がつているかなどの確認など気配りと責任が必要です。

それから介助者と障がい者に分かれて目隠しした体験では介助者のほうは「あと何メートル先に〇〇がありますよ。」「あともう少しで目的地です。」などの声掛けをして道案内をしたり歩くスピードも合わせたりしないといけないのでとても難しかったです。私が目隠しをした時にはまっすぐ歩いているのか分からないし、黒い壁に向かって歩いていような不安と怖さが入り混じった感覚でした。目の不自由な方は人と話す時でも相手の表情が見えないのでより言葉を声に出して伝えることが大事だと思いました。私はこの体験を通じて、声掛けして介助されることにとても安心感がありました。けれど障がい者の方が必ずいつも助けを求めているわけではないのも事実です。障がいがあっても同じ人間です。特別扱いされることを望んでいるわけではないので、私たちがこのような体験で障がいについて理解しお互いにアップデートして支え合える社会になると良いと思います。

それから介助の必要の有無は別として、障がい者役を体験した時に介助者が一声掛けてくれるたびに安心したことは事実です。介助をしなくても声掛けコミュニケーションはとても大事なことだと思います。これは社会全体でも言えることですが、学校・仕事・地域・近所など一声掛けることでお互いに心が温かくなりそれが支え合いの一步だと思います。

今、当たり前前に見えること、聴けることに感謝して、自分のためにはもちろん、家族や人の役に立てることができるようになりたいと思います。

また、このようなボランティア体験にこれからも参加して、障がいについて知識を学んだり「障がい」が壁になってコミュニケーションが取れないということにならないように、お互いが支え合えるような関係でお互いが暮らしやすくなる社会になるようにしたいです。

最後に、視覚障がい者が困った時の合図も教えてもらいました。「白杖SOSシグナル」で、白杖を垂直に頭上に挙げることで「お手伝いお願いします」の表現で全国に広がってきているそうです。このサインを見かけたら「お困りですか」と声掛けしたいと思います。

私を変えてくれた弟

熊野町立熊野東中学校 二年 小 出 安千佳

私には二歳違いのダウン症という障害を抱えた弟がいます。私はその弟がこの作文を書くまで正直苦手でした。なんで障害を持っているという周りとし違っただけで特別扱いされるのが全くわからなかったからです。たしかにあまり器用にできないかもしれないけど障害と関係ないところで特別感があると思っていたからです。例えば宿題だつて私はノート計二ページは確実にあり、三十分以上は絶対にかかります。しかし弟は小学一年生の頃から線を引くことからひらがなに変わっただけで一枚も枚数が増えてません。やる時間だつて五分あればできて、丁寧さも弟はわざと面白半分でやって怒られないのに私は怒られて…本当に不公平だなと思います。

しかし、ある日夏休みの宿題で弟が習字をしていました。いつもは宿題プリントにお手本が薄く書き記されていても手こずるのに、真っ白な半紙に「すいか」と何度も何度も練習を重ねながら一生懸命書いていました。特にすいかの「す」のくるりんとするのが一番の難しい点だったと思います。しかし、練習していくうちに「す」がすぐくきれいに書けてきて、段々と努力が結果に変わっていったのです。あの真剣な表情は忘れません。時々ふざけることもあったけれど、一番成功した「すいか」を見てみると、誰が

見ても読めるようなきれいな字で書いていました。その半紙の下には何十枚も練習したあとが残っていて、次は努力が数字へと変わっていったのです。いつも楽しそうでいいな、と思っていた私は急に胸が痛くなりました。今までもこんなに弟は頑張ってきていたのにその頑張りを私が見つけられていないだけなのにあんなに酷いことを思っていたんだ、と私が惨めになってきて：振り返ってみると今までも弟は自分の楽しみを見つけ一人楽しんでいたり、これでもかというほどもう一人の三歳の弟にも優しくしていたり、自分ができる範囲でお手伝いをしていたり、私ができない、たくさんのことができていて、弟は勉強も運動もあまり得意ではないけれど、誰かの心の支えになっていたのかなと気がついたんです。振り返ってみると、小学校でもデイサービスでもいつも沢山の人から「元気をもらっているよ。」と言う言葉を耳にしていました。勉強や運動が障害を持っていない人よりできなくても、自分なりに自分一人のできる楽しみやできることを見つけて、支えてもらっている人に感謝と成長を伝えていたのかと思うと、すごく感動します。私も弟からたくさんの優しさをもらっています。

今でもなんでもいつも障害者だけが私たちよりも楽な思いをしていきているのか。障害者は社会保障がたくさんあり、二十歳から障害者年金が下り、お金を受け取れるのに俺達、私達が苦しい思いをしないとイケないんだよという人がたくさんいるかもしれない。私もその中の一人でした。ですが「障害者」＝「楽な思いをしている」わけではなく、ただ自分が見つけきれないだけで、できないことを他の自分ができていること

で補っていて努力をしています。そして輝いています。弟には弟の良い所もあるし、弟にしか出来ないことがあるという事を見つけられて、私ももつと頑張ろうと思うきっかけになりました。また、弟は障害者にいい印象を持たなかった私をここまで変えてくれました。今の私はいつか障害者も世界で活躍できるようになるまでそう遠くはないと思います。だって人の心を変える力があるから。私はこれからも多くの障害者とも向き合っていきたいなと思いました。



高齢者の幸せとは

広島市立五日市南中学校 二年 迫 田 紫 月

ある日、私は家族と買い物にでかけたとき、近所のおばさんと話しているおじいさんを見かけた。近所でたまに見かけるくらいのおじいさんだったが、そのおじいさんの笑顔は、イキイキとしていて、おじいさんにとってかけがえのない幸せな時間のようで私も嬉しくなる様な光景だった。このおじいさんに限らず、老後の人生を楽しむ上で人と関わることはとても大切で、特に近くに家族がいない高齢者にとっては、生活の彩りになるのではないかと感じた。人が楽しく、生きたいように生きること、そして、支え合いながら互いを尊重するこの地域に住んでいて良かったと思った。

数日後、あの楽しそうに話していたおじいさんを私は車の中から見かけた。おじいさんは、遮断機が降りた踏み切りの中にいたのだ。遮断機が降りてくるまでにほんの少し渡りきれなかった様子で、私は車の中でとっさにどうすることもできずにいた。近くにいた若い男性が、おじいさんを遮断機の外へ連れ出してくれ、幸い大きな事故にはならなかった。先日、嬉しそうにしていたおじいさんの人生を尊重して、共に生きている地域を誇らしく思っていたが、私は一気に分からなくなつた。

高齢者の生き方を尊重することと、地域社会がどこまで寛容にできるか、普通の人の

生活を成り立たせるか、私はいろいろと考えた。このような高齢者が渡りきれず踏み切りの中で止まってしまうことは、全国各地で起きており、時には緊急停止ボタンを押さざるを得ない状況になることもあったり、痛ましいニュースも見聞きする。事故が起きると、家族の悲しみはもちろんのこと、多くの人が影響を受ける。高齢者が自分らしく、本人の望む地域での生活を全うできることは、人としての基本的な喜びであり、とても素敵なことだと思う。しかし一方で、高齢者の事故も近年、無視できない状況にある。事故防止のために高齢者を全く外出させないようにすることは、本人にとっても良くないし、そんな制限はできない。例えば家族といたとしても、誰かがずっと見守ることは、不可能に近い。

では、本人の意向を無視して高齢者を施設に入居させればよいのだろうか。周囲の人が短絡的に施設に入居させることは、高齢者自身が幸せだと感じられるだろうか。そんな事をすれば人を抑圧していいかと思ってしまう。周りの人は日々の影響が減り、公共の福祉という観点では良いのかもしれないが、高齢者は、近所の人と楽しく話すことができなくなるなど普段の生活が一変して、幸せを感じられない人が多くなってしまうのではないか。

踏み切りのおじいさんを思い出してみると、町の人と話す笑顔の時間と、踏み切りで危険な目に遭ったことは、高齢者の生活の表裏であると思う。ただし、一番大切なことは、高齢者が外を一人で歩くことも、施設に入居するか決めることも、その人の権利だ

ということだ。このことを家でも話してみたが、年代や家族構成、境遇によって、体験や考え方が異なるため、意見が分かれた。施設に入居したくないと思う人もいれば、家族に迷惑をかけないためにと入居するという人の意見もあった。また、一緒に暮らしてしんどい思いを経験した人もいるという意見も一理あると思った。

できることならば、最終的には一定のルールや方針を法制化できたら良いと思った。施設に入居させる条件を決めることは簡単ではない。健康状態は人によって異なるため、年齢を条件にはできないが、健康状態で分けしたり、家族構成で加味したりすることはできないだろうか。

今、世界は多様な価値観を認め合おうとしている。高齢者のことだけでなく、LGB T Q問題でも、少数派の人が幸せに生きるために皆で理解し合うための過渡期にある。目の前の難しい問題から目を背けることなく、私は人としての幸せは何かを考えていきたいと思った。

SNSの問題と対応策

広島市立亀山中学校 二年 宮 田 智 規

SNSの普及によって、私たちは日々の感情や出来事を簡単に共有できるようになった。しかし、その便利さの裏には、誹謗中傷や無断転載といった問題も潜んでいる。私自身もこれらの問題に直面した経験がある。

まず、誹謗中傷についてである。私は中学入学後、友人たちとの連絡手段として主にSNSを使用していた。メッセージや写真のやり取りが簡単にでき、グループチャットも便利のため、学校のクラスメイトや部活の仲間たちとのコミュニケーションに欠かせないツールだった。ある日、グループチャットで私のことを悪く言うメッセージが送られてくるのを見つけた。「あいつは面白くない」「あの発言はちよつと変だよね」といった軽いからかいのような内容だった。最初は冗談だと思っただけで気にしないようにしていたが、そのようなメッセージが増えるにつれて、少しずつ不安が始めた。誰かに相談するのもためらわれ、どうすれば良いか分からないまま過ごしていた。しかし、親友が私の様子を心配して声をかけてくれたことで、正直に自分の気持ちを話し、親友と一緒に対策を考えることができた。結果として、グループチャットでの不適切な発言についてメンバー全員で話し合い、お互いに配慮することを約束した。

この経験から、誹謗中傷の言葉が一瞬で人の心を傷つけることを痛感した。また、信頼できる人に相談し、対策を講じることで問題の解決につながる事が理解できた。

次に、無断転載について私は趣味で写真を撮ることが好きで、SNSのタイムラインに自分の撮った風景写真や友人たちとの楽しい思い出を投稿していた。ある日、友人が私の画像を無断で他のSNSにアップしているのを見つけた。その友人は私の許可を得ずに写真を自分のものとして投稿し、多くの「いいね！」やコメントを受け取っていた。最初に見つけたときは驚いたが、友人に対して冷静に話をすることにした。無断転載がなぜ問題なのかを説明し、次回からは必ず許可を取って欲しいとお願いした。友人は私のお話を理解し、謝罪して投稿を削除してくれた。この出来事から、無断転載に対する対策として、作品にはウォーターマークを入れることや、友人と事前に共有のルールを決めることが重要だと認識した。

これらの経験を経て、SNSの利用には慎重さが求められると実感した。誹謗中傷に対しては適切な対応と心のケアが必要である。SNS上で中傷を受けた場合、自分だけで悩まず信頼できる人に相談することが重要である。また、無断転載に対しては、自分の作品が盗まれないように対策を講じることが大切であるということが分かった。

最後に、SNSを利用する際には、他人に対しての強い思いやりが何よりも大切であると感じた。強い思いやりが無ければ、デジタルタトゥーという一生消えない記録が将来、大事件を引き起こすかもしれない。他者を尊重し、相手の立場に立って考えること

で、SNS上の相手とのトラブルや問題などを減らすことが可能になる。SNSは便利で楽しいツールである反面、その利用には責任が伴う。今後もSNSを安全に利用し、他人を傷つけることのないように心がけていきたい。

このように、SNSの誹謗中傷や無断転載に対する対策や意識を高めることが、私たち全員にとって重要な課題である。今後は世代関係なく、日頃からSNSのトラブルの実例について友人や家族と話し合い、解決法を考えなければならぬと強く感じた。



本当の自分でいたくて

広島市立祇園中学校 二年 中 本 絢 菜

世の中には本当に様々な人がいます。その中で嫌いな人もいる、これは誰でも同じことだと思います。人を嫌うこと自体には問題ないのです。

しかし、なぜ人はいじめをしてしまうのでしょうか。「気に入らないから」「自己中心的だから」「顔が嫌いだから」などの理由がよくありますが、正直こんなの理由にはなっていません。なぜなら、側から見ると言い訳にしか聞こえないからです。ただ、いじめをする人たちはまだ心が幼く弱いので、ストレスや疲れなどをいじめで発散してしまうのではないかと思えました。これは幼い子が自分の思い通りにならなかった時ものに当たったりするのと同じです。しかし、そもそもいじめを止めれば済むのではと思う人もいるでしょう。ところが、そう簡単には上手くいかないのです。本当はいじめを止めたい人だっていると思います。しかし、自分もいじめられたらと思うと止めたくても止められません。こうしていじめがあるクラスのはほぼ全員が共犯者になってしまいうのです。どうしてもそんなことが言えるのかというと、私自身が小学生のときにいじめを受けましたからです。この人は信じていたのに、と次から次へと裏切られていく感覚を今でも気持ち悪いくらい覚えています。この頃の私は、すっかり周りの人と合わせすぎる癖がつ

いていて本当の自分でいられなかったです。毎日毎日ずっといじめや差別におびえながら過ごす日々嫌気がさした私は、ある行動を起こすことにしました。今では、その行動をしてよかったなと思っています。それはただ、信頼できる人に相談して、話を聞いてもらっただけです。当時友達がいなかった私は、母と父に相談しました。母と父が、とても真剣に話を聞いてくれたおかげで、やっと大切なことに気がつくことができました。本当の自分でいてもいいということに。その時私は、やっと解放されて、自由に動けるような、体が軽くなったような気がしました。ちなみに、一人行動が好きだということにも気づけたので、今でも友達は作っていません。しかし、それは決して悪いことではないのです。それを含めて「本当の自分」なのだなと思えました。私は、いじめで悩んでいる人を見かけたら、「今は苦しいかもしれないけど、いつか光は見えるよ。本当の自分を大切にしていね。」と声をかけたいです。そしてその人が信頼できる誰かに相談してみてもいいなと思えました。私のように、いじめや差別を通して得たものがある人はいるかもしれません。しかし、いじめや差別を受けた人の心には一生消えない傷が残る、海馬には一生忘れられないトラウマとして残ります。もし、信じていた友達に裏切られ、友達がいなくなっていくなりいじめが始まってしまったら、あなたは耐えることができますか。私は改めて想像してみると人間不信になりそうなくらい怖いのです。また、人の言葉は簡単に人を傷つけたりいやすことができます。極端に言うとうと、未来を変えてしまうことだってあるのかもしれないなと思いました。

今日も、明日も、明後日も、その先の日もずっとずっといじめや差別はなくならないのかもしれない。しかし、増やさないように、少しでも減らせるような努力は私たちにもできると思います。いじめをしないために、嫌いな人と関わらないようにするとか、人のいいところをみつけてみるとか、いじめを受けた人はどんな気持ちになるだろうか考えてみたりするのがいいと思いました。いじめや差別を世界中でなくすためなら、こんなに小さなことからでも始めてみる価値はあるのではないのでしょうか。



声を聴いて

広島市立段原中学校 二年 匿名 希望

文部科学省が行った調査によると、令和四年度の国立、公立、私立の小中学校の不登校児童生徒数は約二十九万九千人で過去最多となったそうだ。不登校児童生徒数は年々増加していつており、今や小学校では約六十人に一人、中学校では約十七人に一人が不登校とされている。そして、私もその一人だった。

小学校三、四年生の二年間、学校に行くことができなかった。きっかけは本当に些細なことを言われただけだった。相手にとってはちよつとしたいじりで言ったのだろうが、私にとってはいじりだと分かっているも傷付いてしまう言葉だった。その日から、学校は「楽しい場所」から「怖い場所」へと変わっていき、私は不登校になった。

相手に悪気がないことなど分かっていた。だからこそ、自然な気持ちでその言葉が出たのだと余計傷付いた。あのととき、誰かに相談していればまだよかったのかもしれないけれど、当時の私は、相談しても私の思いは分かってもらえない、何より「相談するところが恥ずかしい」と思ってしまったのだ。

そんな私だったが、小学五年生からは学校に行くことができるようになった。学校に行こうという気持ちになったのは、親、友達、そして先生がいてくれたからだ。親は

「学校に行きなさい」とは言わなかった。他の小学校に転校することや、学校以外の環境で学ぶことなどを提案してくれ、常に私に寄り添ってくれた。友達の手紙を送ってくれて、嬉しさをたくさんくれた。先生は二、三日に一回家に来てくれ、いろいろな話をしてくれた。そして、小学四年生のときに先生から

「学校が終わってみんなが帰った後に、門にタツチしてみにこないかな。」

と言われてからは、そのことを目標としてみんなが帰った後の学校へ行くこともあった。たまに校舎に入ると、他の先生が笑顔であいさつをしてくれたり、ピアノをひいてくれたり、面白い話をしてくれたりと、誰も嫌がることなく接してくれた。そのおかげで私は、学校は「怖い場所」ではなく「楽しい場所」だと分かった。たくさんの人が私の声を聴いてくれ、理解してくれた。

そうして学校に行けるようになった私は、とても嬉しいことがあった。それは、友達が「普通に接してくれたこと」だ。もちろん私が二年間不登校だったことは知っているにも関わらず、他の人と変わりなく話して、遊んでくれた。あのとき、変に気を遣われていたり、話しかけられなかったり、特別な扱いなどをされていたら、また不登校に戻っていただろうなと思う。たまに

「大丈夫そう。」

と声をかけてくれる友達もいた。その優しさに涙が出そうだった。それほど嬉しかったのだ。

だが、最近はいじめられている子が先生や親に相談しても、「それは勘違い」や「あの子がいじめられる訳がない」などと言われ、いじめられていることを否定されてしまうこともあるそうだ。よく、「困ったことがあったら相談しよう」と言うが、相談することは簡単ではないと思っている人は多いはずだ。ましてや、いじめについての相談などできない子の方が多いだろうし、私だってできなかった。それぐらい勇気のいることなのだ。

もちろん、根本的な問題であるいじめをなくすことができるのならそれが一番だ。しかし、いじめは減るどころか年々増えているのが現状だ。無くすことは難しいだろう。そうなると、いじめられた子への対応が重要になってくるだろう。私は周りに「私の声を聴いてくれる人」がたくさんいてくれた。でも、そうでない子だっている。確かに、不登校は豊富な経験を得ることができず、狭い世界で生きていくように見える。しかし、自分には自分なりの学び方や生き方、世界がある。学校に行くことが正しくて、不登校は悪いなんてことはない。世界にはたくさんさんの道がある。どの道を選んで、どんな声を出すか、それは自分次第だ。そして、選んだ道を出した声を、自分の思いを、より多くの人が受け入れてくれるようになってほしい。

こどもの人権110番

受付時間：平日8時30分から午後5時15分まで

フリーダイヤル ぜろぜろなのひゃくとおばん

0120-007-110

いじめにあったとき、困ったことがあったときは、
携帯・スマホ・PHSからも利用できます。

インターネット人権相談受付窓口

<https://www.jinken.go.jp/>（パソコン・携帯電話・スマートフォン共通）



SNS（LINE）による人権相談

友だち追加はこちらから！

アカウント名：「SNS人権相談」 検索ID：@snsjinkensoudan



第四十三回全国人権作文コンテスト

広島地区大会入賞作文集

令和七年一月 印刷
令和七年一月 発行

発行者 広島人権擁護委員協議会

広島市中区上八丁堀六番三十号

広島法務局人権擁護部内

印刷者 鯉城印刷株式会社

広島市中区十日市町二丁目八番二号

◎ 本作文集を転載又は教材等に使用される
場合は左記にご連絡ください。

広島法務局人権擁護部

電話 〇八二一三二八一五七九〇

FAX 〇八二一三二八一八〇八七

